令和７年度第１２回　感染症発生動向調査協議会

令和８年３月１８日

月番：川本典生

１　前月の感染症発生動向について（2026 年第 6 週～9 週・２月）

＜全数把握対象疾患＞

- 一類感染症の発生は認められなかった。
- 結核は 19 例で、先月と同等で、それぞれの集団で一定の報告があった。また、潜在性結核感染症も 07 週を除いて１例ずつ報告があった。今年に入ってからは 80 代の患者が特に多く報告されている（39 例中 10 例）。
- 腸管出血性大腸菌感染症の発生が今回は認められなかった。
- その他の三類感染症も今回は発生が認められなかった。
- 四類感染症では、E 型肝炎とレジオネラ症が１例ずつ発生がみられた。
- 五類感染症
  - 梅毒は 9 例報告された。前年比 77.5%であった。１例が無症候性で、その他はすべて早期顕性梅毒であった。
  - アメーバ赤痢２例、ウイルス性肝炎１例、カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症３例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症３例、後天性免疫不全症候群２例、侵襲性肺炎球菌感染症４例、水痘（入院例）３例、百日咳 10 例、麻しん１例が報告された。 特にカルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症は前年比 500%であり引き続き注意が必要である。また、劇症型溶血性レンサ球菌感染症が前年比 120%、後天性免疫不全症候群が前年比 166.7%であった。

＜定点把握対象疾患＞

- インフルエンザは前月比 165%で、前年同期比 1038.7%となっている。
- 新型コロナウイルス感染症は前月比 88.1%でまた、前年同期比 21.6%, 前々年同期比 65.1%である。
- 急性呼吸器感染症は前月比 193.8%である。
- RS ウイルス感染症が前月比 100.7%で同等であるのをはじめとして、その他の多くの感染症は例年通りか例数の少ないものは散発的な流行にとどまっている印象である。
- STI については、何れも前年と同等の流行状況である
- メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症についても急激な変化は見られないようである

２　検討すべき課題

- インフルエンザウイルスについては、今年に入ってからは主に B 型に移行して流行が続いている。１年前は B 型の流行が少なく、その前も少なかったことと対照的である。
- 急性呼吸器感染症の検出状況は現在の B 型のインフルエンザの流行の状況を反映しているがその他にも多種のウイルスが報告されている。

３　情報提供すべき事項

- 本邦における肺低形成・気道狭窄・先天性食道閉鎖症・先天代謝異常症・神経筋疾患に対するパリビズマブ使用の手引き（2025 年追補版）が発行
  - 2024 年に以下の患群が追加
    - 肺低形成
    - 気道狭窄
    - 先天性食道閉鎖症
    - 先天代謝異常症
    - 神経筋疾患
- 小児呼吸器感染症診療ガイドライン 2022 百日咳に関する追補版（2025）が発行
  - マクロライド耐性百日咳菌（MRBP）への対応
    - マクロライド耐性百日咳菌（MRBP）が国内でも報告され始めた。
    - 2024 年以降、PCR 検査、multiplex PCR が利用可能となっている。
    - 23S rRNA A2047G 変異
    - MRBP 疑い例：ST 合剤考慮。

４　情報提供（月番委員専門分野から）

- 検査結果に届出疾患であることを明示する取り組み（日本小児感染症学会）
  - 届け出が必要であることに気付いてもらうために検査結果に明示するようにする

＜検討結果＞